

ブロンテ書簡研究(1)

岩 上 はる子

(平成5年6月30日受理)

はじめに

39年の生涯で Charlotte Brontë は 4 作の長編小説、それを上回る量の初期作品、そして多くの手紙を書いた。もしその主な文通相手であった学友の Ellen Nussey が500通余りのシャーロットの手紙を保存していなかったなら、Mrs Gaskell によるシャーロット・ブロンテの伝記もずっと貧弱なものに終わっていたに違いない。さらにブロンテ家の生活もいっそう謎に包まれた神秘的なものになっていたことであろう。

ブロンテ書簡の大半はシャーロットの手紙である。それらの手紙は筆者の意外な素顔を伝えている。シャーロットはエレン以外にもうひとりの学友 Mary Taylor とも文通していた。彼女への手紙はほとんど残されていないが、その内容はエレンへのものとは異なり、文学、政治、思想などを取り上げていたことが、エレンへの手紙の文中から推測される。後にシャーロットは出版者の W.S. Williams や George Smith などとも仕事を越えて、文学から家庭問題にいたるまで様々な意見を交換している。内気で社交性に欠けていたシャーロットが、手紙の中では男性に対してさえ極めて率直で大胆な意見を述べているのである。

政治に強い関心をよせ当時のジャーナリズムに接していたブロンテ家の人々は、ハワースの寒村に住んでいたが、決して時代のうねりと無縁ではなかった。荒野の向こうには織物工業で栄えるリーズやブラッドベリ、さらに植民地貿易の拠点リバプールがあった。ブロンテ姉弟妹は保守的な価値観をもつ牧師の子どもに生まれながらも、急速に発展し変貌していくイギリス社会の現実をどのように生き抜いていくかを問われ続けた。ある意味では野心家であり強い上昇志向の持主でもあったシャーロットは、その積極的な生き方を通じて新しい女性の意識を印象づけている。以下ではシャーロットを中心に、彼女のその時々々の状況をたどる上で必要と判断したところでは父親 Patrick Brontë や弟妹たちの手紙や日記も取り上げた。本稿は手紙の翻訳と注釈によってブロンテ家の人々の姿とその生活、加えて背景となるヴィクトリア朝前期のイギリス社会についても触れていくつもりである。

書簡の翻訳にあたっては T. J. Wise / J. A. Symington, eds., *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence* (The Shakespeare Head Brontë, 4 vols. Oxford, 1932) を使用した。整理の都合上、各手紙に番号をふったが、参照しやすいように () に同書で用いられた番号を併記した。

(一) 1829年から1832年

現存するシャーロットの最初の手紙は、1829年9月——子供たちが「若者たちの劇」を書き始めてから半年後——伯母のミス・ブランウェル (Miss Branwell) に連れられて、大伯父フェネル牧師 (Rev. Fennel) を訪ねたときに書かれたものである。子供たちはカウアン・ブリッジ以来はじめて家を離れ、ハワースから12マイルほどの Todmorden の牧師館に滞在した。

1 (16) クロースストーン牧師館 1829年9月23日
お父さまへ——おばさまにいわれてこの手紙を書いています。「とくに何もなければ」金曜日の夕食までには帰ります。お元気のことと思います。天気が良くないので、あまり外出できません。でも本を読んだり刺繍をしたり、とても楽しく過ごしています。フェネルおじさまりが毎日わたしたちの勉強を見てくださいます。ブランウェルは風景を二枚写生しました。わたしもエミリやアンといっしょに、おじさまのウェストモーランドみやげの湖の絵を模写しました。²⁾ おじさまはわたしたちの絵を手元におきたいそうです。座席に余裕がないので、金曜日にハワースまで送っていけないのが残念だといっています。みんなから愛をこめて。

シャーロット・ブロンテ

- 1) フェネル牧師は母マライア (Maria) の伯父で、彼女は当時 Woodhouse Grove にあった伯父夫妻の家で、パトリック・ブロンテ (Patrick Brontë) と知合い結婚することになった。
- 2) 子供たちが模写した湖の風景画は、1786年に出版された William Gilpin (1724-1804) の画集のなかの作品。彼の風景画を載せた旅行記はブームになった。ブロンテ家では絵画への関心が強く、牧師館には John Martin (1789-1854) の版画が飾られ、それはグラスタウンの情景描写のヒントになった。シャーロットの絵画作品 'The Cross of Rivaulx' (23. 12. 1834) はギルピンをまねたものである。他に W. Finden などの影響が初期作品には見られる。

1830年夏、病を得たブロンテ牧師はその後も健康の衰えを感じ、娘たちの将来を案じた。彼女たちが将来ガヴァネスとして自活できるためには教育を受けさせる必要があった。だが費用の問題としてカウアン・ブリッジで娘ふたりを喪っていた父には良い方策が見つからなかった。この苦境に

対してソーントン時代からの牧師仲間が助力を申し出、15歳になったシャーロットはロウ・ヘッドに入学することが決まり、31年1月にハワースを出発した。

2 (17) ヨークシャー州ブラッドフォード近郊ハワース 1831年4月28日⁹⁾

拜啓——娘シャーロットが格別のご配慮を頂いた由、一言御礼申し上げたく筆をとった次第です。これまでもひとつ方ならぬお世話になりましたこと、我が家の者たちは忘れるものではありません。娘も心から感謝いたしております。あの娘はキッピングでお会いした頃のことをまだ覚えていますし、また私たちがあの古き良き日を懐かしんで、あなたのことを時おり話題にしているのを聞いております。先頃、われらが友ミス・ウースウェイト⁴⁾から便りが届き、少々懸念していたところです。教会も国家も然るべき改革が必要であるという私の意見が、ひどい誤解を生んでいるようなのです。それも私が尊敬申し上げている人たちのあいだで。私はすべての点で——政治に関しても——ソーントンにいた頃と、なにひとつ変わってはおりません。教会と国家に対して、私ほど熱い真摯な思いを抱いているものは他にないといってもよいほどです。しかし長年の熟考の末に、私は確信するに到ったのです。我々の優れた制度を心から大切に思う人間が現れ、然るべき改革を提唱しなければ、巧妙な敵どもはこの機に乗じて国民感情を——すでに充分すぎるほど沸騰しています——煽り立て、全土で暴動を引き起こし、ついには革命を招来させることは多いにありうることなのです。フランスで何があったか、我々はよく見知っているではありませんか。⁵⁾ 改革反対を唱えたウェリントン公爵は、それがために閣僚たちと辞任に追い込まれたのです。⁶⁾ この頑迷さがもたらした失策はもうひとつあります。愚かにも改革反対者たちは、政府の閣僚たちを孤立させ、その結果、国王が議会の解散を宣言するという状況に立ち至ったのです。おそらく早急に次の議会が召集されるでしょうが、それはさらに無策で、おそらく改革に向かって今度は行き過ぎを演じることになるでしょう。

したがって私は穏当な、というか適度の改革が必要であり——そうすることによって理性ある賢明な人々を満足させ、なにかんづく真の敵である者たちの攻撃の手を封じ、もって教会と国会を破滅の危機から救うことになる——との考えから、わたしは選挙法改正案⁷⁾を支持するのです。もっとも議会はすでに法案を否決してしまいましたが。私に言わせれば、それは良心と決断の問題で、それに背くぐらいなら、あえて貧困、投獄、死の危険をも厭いません。わたしの友人たち——少なくともその何人か——は、わたしとは行動の指針を異にするかもしれません。しかし教会と国家によせる志しと熱意に変わりはありません。

もっと身近なお話を。病気が癒えて一年近くになりますが、いまだ本調子ではありません。昨年夏の夏に肺炎を起こし、数週間、死線をさまいました。それからこの半年というもの、体力が回復せず気力も戻ってきませんでした。ひと月ばかりは、教会の務めも果たせない状態でした。⁸⁾ 今ではど

うにか執り行ってはいますが、なかなか負担です。ずっと良くなってはいるものの、完治するのは難しいような気がします。ときには、このまま死んでいくのではないかとすら思います。けれど我身は主の御手にあります。最後には種々の問題から解き放たれて、永遠に御国の住人となることでしょう。あなたが以前ほどお元気ではないと聞いて、心配しています。主の御加護がありますよう、またいつまでもご主人とお子さまたちのもとに居られますよう、心から祈っています。あなたとファース夫人⁹⁾に最後にお会いして以来、キッピングにはほんの一度出かけたきりです。みなさま、ご親切にしてくださいました。けれど私にはかつての友人たちが忍ばれて、もの悲しい気分がしました。早々にお暇し、もう二度とこの地には足を向けるまいと心に誓いました。ミス・ブランウェルはまだこちらにいて、幼子たちの面倒をみてくれています。一同よろしくと申しております。ファース夫人にお便りするか、あるいはお会いするようなことがございましたら、どうかくれぐれも宜しくお伝えください。私どもに代わって、娘シャーロットへの御温情に御礼申し上げてください。

敬具

- 3) ブロンテ師の手紙。宛名は Thornton の副牧師時代 (1815-1820) の友人のひとり Mrs Franks (旧姓 Elizabeth Firth)。彼女はソーントンの名家 Kipping House の一人娘だった。ソーントン教会に赴任したブロンテ一家は、同家と親交を結んだ。妻が病死した後、パトリックはまだ独身であったミス・ファースに再婚を申し込み、断わられている。その後、彼女は Huddersfield の牧師 James Franks と結婚した。
- 4) Miss Outhwaite, Fannie (Frances) ソーントン時代の友人。アンの名付け親になり、彼女に 200ポンドの遺産を残した。アンはその金を Scarborough への最後の旅の費用にあてた。
- 5) フランスではシャルル10世治下、旧貴族を中心とする保守派とブルジョワジーを基盤とする自由主義派が対立していた。1830年、国王が出版の自由を制限し選挙法を改悪したことから、パリ市民が蜂起し市街戦となった。この7月革命によってシャルル国王は亡命し、王政復古いらいのブルボン王朝は倒壊した。
- 6) 対ナポレオン戦争の指揮官として勝利を取めたウェリントン (Arthur Wellesley Wellington, 1769-1852) は、1828年に首相となりトーリー党政権を発足させた。だが時代の自由主義的流れに抗しきれず、29年にカトリック解放令を成立させた。その後トーリー党内の保守派と進歩派が分裂し、30年の総選挙ではホイッグ党に敗れた。
- 7) 選挙区制度は16世紀以来そのまま、19世紀になり産業革命によって人口の大移動が起こっていたにもかかわらず、その議席配分や選挙権などは是正されなかった。改革動議は1819, 21, 22, 26年の4回にわたって提出されたが、議会で否決されていた。1830年に政権を握ったホイッグ党は31年に第一次選挙法改正案を下院に上提したが、上院の激しい抵抗にあって成立しなかった。そのため民衆が激昂し、ブリストル、ノッティンガム、ダービーでは暴動が発生した。

- 8) 1830年に入ってからパトリックはしつこい咳に悩まされ、肺の鬱血から気管支炎へと症状が進み、初夏の頃には起きられなくなっていた。6月の終り、主の御告げを受けたという見知らぬ老人が牧師館に現れ、間もなくキリストの訪れがあるので御迎えの準備をするように言って姿を消した。折りしも父の病状が重かったため、それは不吉な前兆のように思われ、シャーロットは泣きじゃくったという。初期作品‘The Following Strange Occurrence’ (22. 6. 1830) 参照。
- 9) Mrs Firth フランクス夫人 (Mrs Franks,旧姓 Elizabeth Firth) の継母 (Elizabeth の母は1814年に馬車の事故で亡くなり、15年に父が Miss Anne Greame と再婚した。) プランウエルの名付け親。

3 (18) ロウ・ヘッド 1831年5月¹⁰⁾
 親愛なるフランクス夫人——先日、ハダースフィールドから小包が届きました。心より感謝しております。洋服とモスリンを本当にありがとうございました。またご親切にもショールを送ってくださいましたミス・ウースウェイトにも、お礼を申し上げたいと思います。霜焼けはすっかり良くなりました。アトキンソンさん¹¹⁾がお見えになったのに、外出していて残念でした。ファース夫人によりしくお伝えください。心暖まるお手紙をいただいたものですから。ウラー先生たちがくれぐれもよろしくとのことです。お借りした「予言に関するキースの研究」¹²⁾をととても喜んでいらっしやいます。何くれとなくお心遣い頂き、お礼の申し上げようもございません。

愛と感謝をこめて

- 10) Roe Head ウラー姉妹 (Miss Woolers) が経営していた女子寄宿学校。ハワースから南東に20マイルほど離れた Mirfield Moor (後に Dewsbury Moor に移転) にあり、シャーロットが入学した当時は10人ほどの生徒がいた。ブロンテ師のソーントン時代からの友人たちで、ハダースフィールドのフランクス家や Hartshead のアトキンソン氏の牧師館からも近かったため、両夫人がシャーロットの様子をみてくれるという安心感もあった。シャーロットは1831年1月から32年5月まで在学し、その後1835年7月から38年12月まで教壇に立った。なおウラー姉妹は Margaret Wooler (1792-1885) 以下 Catherine, Susana, Marianne, Eliza の5人。
- 11) Rev. Thomas Atkinson ソーントン教会の前任者で、シャーロットの名付け親。ロウ・ヘッドでの学資を援助してくれた。
- 12) Alexander Keith (1791-1880) 予言に関して次のような本を書いている。*Sketch of the Evidence from Prophecy* (1832), *Evidence of the Truth of the Christian Religion derived from the Literal Fulfilment of Prophecy* (1828)

シャーロットは毎週、家から便りを送ってもらっていた。今ではグラスタウン物語はプランウェ

ルがとりしきり、エミリとアンは独立してゴンドル物語の創作をはじめていた。だがシャーロットには創作の時間はなかった。猛勉強の結果、シャーロットは入学時には最下位のクラスであったのが、7月の夏休みに帰省する頃には学校で一番になっていた。

4 (19)

ロウ・ヘッド 1831年5月7日

愛するブランウェル——週に一度書く便りの宛先は、いつものようにあなたです。いちばん話したい相手はあなただからです。遠い道りを、(さぞかし) 疲れたことでしょう。¹³⁾ はたして無事に家に帰りついたか、ぜひ知らせてほしいです。こちらに着いたときは平気だと言っていました、わたしの眼には疲れきっているように見えました。帰った後で、あなたからきこうと思っていたあれこれを思い出しました。思いもかけず会えたので嬉しさが先だって、つい忘れてしまったのです。わたしはこれまで政治にもっていた関心をすっかりなくしてしまったと思っていました。けれども選挙法改正案が上院で否決されたり、グレイ伯爵が追い出された、つまり退陣したことを聞いて嬉しくてたまりませんでした。¹⁴⁾ それで自分がまだ政治への熱意をなくしていないことを、はっきり知らされたというわけです。伯母さまが『フレイザーズ・マガジン』¹⁵⁾ を購読することにしたそうで、よかったですね。お話では、雑誌のなかみは『ブラックウッズ・マガジン』¹⁶⁾ には及ばないようですが。でも丸一年、定期刊行物をまったく読めないというよりましでしょう。そうなりかねません。わたしたちのように人里離れた荒野の寒村に住んでいたのでは、巡回図書館からその手のものを借りることはままなりませんから。¹⁷⁾ この素晴らしい天気で、お父さまのぐあいがすっかり良くなれるといいのですが。また伯母さまが故郷の穏やかな気候を懐かしく思い出されますように。あなたとともに祈っています。

皆によろしく——愛する姉、ブランウェルへ。

シャーロット

13) ブランウェルはロウ・ヘッドまで20マイルの道りを徒歩で姉を訪ねた。この頃(31年5月上旬)彼は'History of the Young Men'を完成させ、続いて'Letters from an Englishman'に取りかかっていた。シャーロットは学校にいる間はほとんど創作していない。だが友人のメアリ・テイラーに自分たちの雑誌の存在をもらしている。

14) 1830年にウェリントンのトーリー党内閣が瓦解した後、グレイ伯爵(Charles Grey, 1764-1845)がホイッグ党内閣を組閣した。首相グレイは、第一次選挙法改正案の上院通過に必要な過半数を得るために、新貴族の創設を国王に奏請した。だが国王がこれに反対したため、グレイ内閣は総辞職した。

15) *Fraser's Magazine* (1830-83) ロンドンの書店 James Fraser から創刊された雑誌。William Maginn (1793-1842) を主筆とし、その強烈な個性で創刊時から7, 8千部の発行部数をもった。

彼は初めはブラックウッズの記事を担当していたが、フレイザーの誘いで移籍した。後にカーライルとラスキンという論者を獲得し、さらにサッカー、テニスなどを寄稿家に迎え、文芸界において主導的な立場を確立した。

16) *Blackwood's Magazine* 正しくは *Blackwood's Edinburgh Magazine* エディンバラの出版者 William Blackwood (1776-1834) によって1817年に創刊された保守派の文芸雑誌。文化的論説、小説、エッセイ、文芸批評などを掲載した総合雑誌で、1820年代の保守化傾向のなかで多くの読者を獲得し、発行部数は3万を越えた。ブロンテ姉弟妹は25年から41年頃まで同誌を愛読し、彼らの初期作品の題材として利用したことがうかがわれる。また1829年1月にはその形式をまねて、自分たちの雑誌 '*Branwell's Blackwoods Magazine*' を発行した。(詳細は拙論「シャーロット・ブロンテ初期作品研究(1)」鳥取大学教養部紀要第23巻、平成元年10月を参照)

17) ブロンテ師は *Leeds Intelligencer* と *Leeds Mercury* の2紙を近くのキースリから取り寄せていた。また1825年から数年にわたって、地元の医師 Dr Driver が *Blackwood's Magazine* を回してくれていた。(1831年で購読をやめたので、伯母が代わりにフレイザー誌をとることにした。) キースリに *Mechanics Institute* (理解ある資本家の手で工業都市などに設けられた福祉施設で、集会場や図書室などがあり、夜間授業なども行なわれ労働者の教育に貢献した) が設立されると、ブロンテ師は33年4月に入会し、子供たちがその図書館を利用できるようにした。またハワース教区の有力者ヒートン家の邸宅 *Ponden Hall* の図書室にも1400冊余りの蔵書があり、ブロンテ姉弟妹が利用したことがわかっている。

ロウ・ヘッドでは、シャーロットは生涯の親友となるエレン・ナッシとメアリ・テイラーに出会った。ふたりはともにヨークシャーの裕福な家庭の娘であったが、その性格は対照的だった。エレンはトーリー派の英国国教会を信仰する旧家の出身で、保守的で伝統的な価値観を重んじた。それに対してメアリの家族は、急進的な非国教徒の新興階級であった。メアリ自身も、家庭の事情もあったが経済的独立を求めて海外へ出るなど、進歩的で行動的な女性であった。ふたりとの文通は1831年に始まり、シャーロットが亡くなるまで24年間にわたって続いたが、メアリはシャーロットのためを思ってか、手紙を焼却してしまった。エレンには語らなかった秘密を、シャーロットはメアリには打ち明けていたと推測される。

5 (20)

[ハワース 1831年5月31日]

拝啓ミス・ナッシ¹⁸⁾——できるだけ早い機会に、先週いただいたお手紙のお礼を申し上げたいと思います。こんなに長いあいだ返事も出さずにいてごめんなさい。この手紙があなたへの最初のものになるでしょう。***さんのご親切なお招き——心から感謝しています——カルヴィン主義につい

ての***氏の講演もぜひ聴きたかったです。面白くためになったに違いありませんもの。けれど感情を義務に従わせねばならない(先日のウラー先生のお言葉です)こともあります。¹⁹⁾しかも今年の半期は休日も多く、このうえもう一日お休みをとというのはわがままと思われたかも知れません。それに勉強も遅れることになったでしょう。あれこれ考えてみると、種々の事情から行けなかったのはよかったのかも知れません。親愛なる友より。

C・ブロンテ

18) Ellen Nussey (1817-1897) ヨークシャーの裕福な地主 John Nussey の末娘。同家には13人の子供があり、Henry は39年にシャーロットに結婚を申し込んだが、断られている。他に John, Ann, Mercy, Sarah, George などが手紙に登場する。Roe Head でふたりが友人となった頃には父は亡く、一家は Birstall にある Rydings に住んでいた。その後37年に Brookroyd に転居。エレンは生涯家を離れることもなく、未亡人となった母や病気の姉、精神障害のあった兄の世話をして独身で過ごした。

19) ロウ・ヘッドでは1773年に出版された Mrs Chapone による古典 *Letters on the Improvement of the Mind* を基にカリキュラムが組まれていた。他に Mangnall's Questions for History and Biography や Milton, Shakespeare の作品が読まれた。『マングナルの質問集』は Wakefield の Crofton House School の校長ミス・マングナルが作成したもので、当時の学校用標準教科書のひとつであった。新しい教育方法によって知られた彼女の学校は、エリザベス・ファースが学んだ所だった。シャーロットの姉マリアとエリザベスも在学したが、授業料が高かったためかほんの短期間であった。

6 (21)

ハワース 1832年1月13日

親愛なるエレン——お便りは嬉しい驚きでした。こんな言い方をしてごめんなさい。でもお約束のことは、あまり本気にしていなかったのです。家に帰ってしまうと、学校のことを思い出させるようなことには、みんな触れたがらないものでしょ。それに家に帰ると、次から次へといろんなことに心を奪われ時間が過ぎてしまうので、学校で約束したことを果たす時間なんてないわと、思ってしまうものです。けれどあなたとミス・テイラー¹⁸⁾は、例外とわかってとても嬉しいのです。***さんが病気とのこと、心配です。ウラー先生も風邪が重いそうですね。コレラはまだじわじわと広がっているようです。でもすべからく神の思召しとおもって、希望を捨てずにいましょう。これまでイギリスはきわめて好運でした。疫病は猛威をふるうこともなく、大陸の国々のように恐ろしい勢いで広がるということもありませんでした。¹⁹⁾***さんがマーシーの絵を気に入ってくれて良かったです。コベット²⁰⁾の作品がなにか参考になればよいと思っていますとお伝えください。でもどうかわたしに暗唱して聞かせるために、ご無理をなさいませんように。せっかくの努力も、ご期待

に比べられないでは申し訳ありませんので。あの名士も信条も(個人的にせよ政治的なものにせよ), わたしの好みではありません。***さんによろしく。メアリ・テイラーとお茶目さんにもよろしく。そしてだれよりも愛をこめて

シャーロット・ブロンテ

20) Mary Taylor (1817-1893) ヨークシャーの実業家 Joshua Taylor の長女。2歳下のメアリもロウヘッドに在学していた。他に Joshua, John, Joseph の兄たちと末の弟 Waring がいた。テイラー家は一族で毛織物工場や銀行などを経営し Leeds や Bradford などの地域一体に勢力をもち, Gomersal に Red House と名付けられた広大な屋敷を構えていた。後に父親の死により事業にも行き詰り, 1845年3月, 一家はニュージーランドのウェリントンに移住した。メアリとシャーロットの文通は続いたが, 手紙は破棄されほとんど残っていない。メアリは1860年に帰国し, 90年に小説 *Miss Miles* を出版した。

21) コレラはもとはインドのガンジス川流域にあった風土病的な性格をもつ流行病であった。だが19世紀の近代文明の進歩, とくに交通の活発化と共に国際交流の波に乗って文明諸国に流行した。イギリスのインド経営および東南アジア進出が世界的な流行の引き金になったことは否定できない。第2次の世界的流行(1826-1837)では, ロシアに進入したコレラは南下してヨーロッパを襲い, イギリスを経てアメリカに渡って太平洋岸に達した。イギリスでは19世紀のあいだに31-32年, 48-49年, 53-54年, 66年の4回にわたって大流行し, その都度, 高い死亡率を記録した。ちなみにブリュッセルでは Heger 氏の最初の妻と子どもが, 1833年9月26日にコレラで死亡している。またマーサ・テイラーも, ブリュッセル留学中の1842年にコレラで死亡した。

22) William Cobbet (1762-1835) イギリスの政治ジャーナリスト。1832年の選挙法改正に伴い下院議員となり, 議会最左翼の指導者として議会改革や社会改革を訴えた。

1832年5月にロウ・ヘッドを卒業したシャーロットはハワースに帰り, 妹たちの勉強を見るかわら教師あるいはガヴァネスの職を探していた。この年の秋, 父の考えで牧師館の隣に日曜学校が建てられ, シャーロットが村の子どもたちを教えることになった。

7 (23)

ハワース 1832年7月21日

愛するエレン——優しく素敵なお手紙, とても楽しく読ませていただきました。家に帰ってからというもの, 毎日お便りを待ちわびていました。とうとう諦めはじめたところです。学校を出てからの私の生活について教えてほしいとのことでしたね。簡単です。たった一日のことを書けばよいのですから。残りの日はどれも似たようなものです。午前中は9時から12時半まで妹たちの勉強をみたり, 絵を描いたりして過ごします。こんなぐあいに楽しく, でも何事もないままにわたしの人生は

過ぎていくのです。こちらに戻ってからお茶に招かれたのは、ほんの二回きりです。今日は午後から、お客さまの予定です。来週の火曜日に、日曜学校の女の先生たちをお茶に招くことになっています。先日L・S・ブルックさんから手紙がきて驚きました。目新しいことはなかったのですが、「学校を出てから、自分のことがあれこれ噂されているらしい」とひどく怒っていました。思うにわたしたちが耳にした例の噂を、あの口の軽いマライアがすっかりしゃべってしまったのではないかしら。W夫人とカリス氏が亡くなられたとのこと、気の毒でなりません。それぞれのご家族には、かけがえのない人だったでしょうに。イザベラ・サグデンについてあなたの友達ハリエット・カリスが言ったことは、わたしには意外でもなんでもありません。彼女の性格についてはミス・ホールから聞いていたので、あまり信用していませんでしたから。ご自分のためには学校に戻られるのがよいと思います。わたしには手紙をたくさんやりとりできるので、家にいて欲しい気持ちはありますが。周りの方々が学校に帰ることに反対なさるのは、あなたが立派すぎ向上しようと頑張りすぎるからなのではないかしら。資質に恵まれたあなたですから、然るべき有能な方（周りにたくさんいるでしょう）の指導を受ければ、高尚な文学そしてそこに含まれますが、詩に対してもしっかりした鑑賞力を身につけられることでしょう。髪の毛を送ってくださらないので、がっかりです。郵便料金が二倍になってもかまいません。²³⁾あなたが遠慮するなら、こちらもおなじ理由から送らないことにします。伯母さまと妹たちがよろしくとっています。お母さまやお姉さまたちによろしくお伝えください。心から愛をこめて、真の友より。

シャーロット・ブロンテ

追伸

おたがい定期的に文通する約束でしたね。間違いだらけのうえに悪筆でごめんなさい。テイラーさんに会ったら、よろしくいって。愛しい愛しいエレン、さようなら。

23) 1839年8月に1ペニー料金郵便法が成立し、翌40年1月10日から実施されたが、それ以前は郵便料金は後納制で、受取人が手紙を受領する際に表示印で示された額を配達人に支払った。なお1812年制定のシングル・レター（手紙の用紙が一枚だけのもの。19世紀になっても封筒は使われず、現在の郵便書簡や航空書簡のような形であった）の郵便料金は距離によって異なっていた。最低料金は15マイル以下で4ペンス。ハワースとバーストールの距離は17マイルで、料金は5ペンスであった。

8 (24)

ハワース 1832年9月5日

親愛なるエレン——盛りだくさんなとても素敵なお手紙をほんとうにありがとう。わたしの貧弱な手紙とはなんと対照的なのでしょう。けれどもニュースがまったくなくても許してもらえと思ひ

ます。わたしが置かれている状況を考えても見てください。新聞以外には、なにも情報を得る手段がないのですから。それにあなたは政治や事件などにあまり興味はないでしょうし。ロバーソンさん²⁴⁾が中風になられたと聞いて、父が心配しています。ご高齢なので完全に回復するのは難しいのではないのでしょうか。週に一度ロウ・ヘッドで講義を受けるのは、とてもよいと思います。きっとそのふたつの重要な分野で長足の進歩を遂げることでしょう。マーサ・テイラーが病気にかかったように行儀がよくなったという話、とてもおかしかったです。長続きするよう願うばかりです。ところでポリー²⁵⁾はこの世にまだ存在しているのでしょうか。もし生きているなら、彼女に会ったら手紙をくれるよう言うていただけませんか。ミス・Hがあなたが考えていたのとまるで正反対の人とわかって、残念でなりません。でもエレン、この世で完璧な人を求めるのがまちがいののではないかしら。あなたは信じやすい優しい性格ですから、Hさんのことをほとんど欠点がないように思いこんだのでしょうか。お手紙の後半について。ご親切なお招き、とても感謝しています。お父さまと伯母さまに相談したところ、ふたりのお許しをいただきました。ですから喜んでお受けするとお返事します。エレン、わたしたちは一般にいわれる女生徒どうしの友情の例外になるのではないかしら。少なくともわたしは会えないからといって、あなたに対する姉妹のような気持ちはすこしも変わるものではありません。お母さま、お姉さまたちによろしく。ことばのかぎりの愛をこめて。

シャーロット・ブロンテ

追伸

見るに耐えない悪筆を怒らないで。それではまた。

24) Rev. Roberson, Hammond (1757-1841) ハーツヘッド教会でのブロンテ師の前任者。

25) Polly メアリ・テイラーの愛称

1832年9月、シャーロットはエレンの家を初めて訪問した。ハワースでたった一台のギグ（一頭立て二輪軽馬車）を借り切って、ブランウェルが姉を送っていった。ライディングス（ナッシ家の邸宅）は、くるみの木の植わった広々とした庭や胸壁のある華麗な建物で姉弟を圧倒した。感激したブランウェルは帰り際に、姉をまるで天国においていくようだと語った。帰宅したシャーロットは勉強のため、次の手紙はフランス語で書いた。

9 (25) (原文はフランス語)

ハワース 1832年10月18日

親愛なる友へ——また離れ離れになり、わたしたちの間には17マイルの距離が横たわっています。あなたと一緒に過ごした2週間は瞬く間に飛びさり、今では過去の楽しい思い出として振り返るしかありません。事故も災難もなく、無事ハワースに帰り着きました。妹たちはわたしの乗った馬車

が見えると家から飛び出してきて、まるで1年も会えなかったかのように喜んで抱きつきました。父、伯母、それに弟が話していた男の方が居間におそろいでしたので、わたしも直ちにそこに行きました。人はひとつの楽しみを失っても、さっそくそれに代わる楽しみを与えられるというのは神のご意志でしょうか。そんなわけで、わたしは心優しい友と別れましたが、すぐに愛する身内のもとへ帰り着いたのです。あなたもわたしを失った後（わたしの出発があなたにとって悲しみであると思ってもよければ）、わたしと同じようにお兄さまやお姉さまのお帰りを楽しみにしていることでしょう。ご親切にもお土産にいただいたりんごを妹たちにやりました。彼女たちはきっとエレンは素敵な優しいひとに違いないといっています。二人ともとてもあなたに会いたがっています。2、3カ月のうちに妹たちがその喜びを得られるよう願っています。もう時間がありません。この辺でペンをおきます。マーシーによろしく。わたしの愛する大切な友エレンへ。

追伸

どんなに急いでこの手紙を書いたか、ちょっと想像もできないでしょう。フランス語で書いてほしくなかったら、そう言ってください。諦めます。でもぜひお返事が世界共通語で書かれていることを期待しています。はじめのうちは少しくらいの間違いは気にしないで。やってみればずっと上達するでしょう。それでは、お便りください、すぐに。お手紙が届くのが待ち切れません。

(二) 1833年から1834年

1832年5月にロウ・ヘッドから帰宅したシャーロットの生活に大きな事件はない。29年3月に始められたグラスタウン物語は、彼女の留守中はブランウェルによって進められていた。帰宅後しばらくしてから、シャーロットは中断していた物語を再開した。それまでの冒険や戦争の物語ではなく、ロマンスを主題としたアングリア伝説である。シャーロットは33年から34年にかけて、創作に熱中し大量の作品を書いている。

10 (26)

ハワース 1833年1月1日

親愛なるエレン——月に一度お便りする約束でした。お手紙をもらってからあっという間にひと月がたち、慌てて返事を書いているところです。「新年」おめでとう。ありふれた文句ですが、本来の意味でこれからの日々いっそう精進されるよう期待します。毎年、元旦になると厳肅な気持ちにさせられ、言うは易く行ない難かったことへの反省が胸をよぎります。自分が旧年どれほど向上したか、新年をどのような心構えで迎えるべきかなどです。愛するエレン、わたしたちは（まだ若いけれど）こうしたことをいくら考えても考えすぎることはないと思うのです。自分の能力を過小評価しているのでしょうか、内気なためなのか、フランス語で手紙をくれないのが残念です。やっ

てみればきつと上達するはずなのに。妹たちに対して責任を感じすぎるのではとのご忠告。わざわざ（ ）をつけて気を悪くしないようにと書き添えてありました。エレン、親切な助言にどうして腹を立てられるでしょうか。心から感謝し、ますますあなたのことが好きになってしまいそうです。二週間ほど前、テイラーさんから手紙をもらいました。クラッパム夫人が男子を出産し、あなたが一月余りロウ・ヘッドを休んでいる、と知らされました。欠席の理由は書かれていませんでした。お身体の具合が悪いのでなければよいのですが、『ケニルワース』を気に入ってくれて嬉しいのです。本当に素晴らしい作品でしょ。小説というよりロマンスで、わたしの見るところ偉大なウォルター卿の最高傑作ではないかと思えます。ヴァーニーの性格が嫌だというナイーブさがいかにもあなたらしくて、とてもおかしかったわ。あんまりおかしかったので、お便りを読みながらつい吹き出してしまいました。確かに悪の化身といった人物ですね。スコットは底知れない腹黒さを描いて、人間性に対する深い理解をうかがわせます。²⁶⁾そればかりか、読者になるほどと思わせるその力量には驚ろかされます。何のニュースもない退屈なだけの手紙で、ごめんなさい。取り立ててお知らせするようなことは何もないのです。お母さま、お姉さま方にくれぐれもよろしく。夜も更けましたので、あなたへの変わることの無い、変わるはずの無い、変わりようの無い愛を誓って筆をおきます。さようなら、愛するエレン。

シャーロット

26) シャーロットはスコットを愛読し、その影響を受けている。特にこの時期の初期作品の中には人物、粗筋、文体にいたるまで強い影響が見られるものがある。拙論「シャーロット・ブロンテ初期作品研究(2)」(鳥取大学教養部紀要第24巻, 平成2年10月) 参照。

エレンのハワース訪問が実現したのは約一年後だった。エレンは牧師館のカーテンのない窓、石の床、染みの浮いた壁紙、家具らしいものがほとんどない質素なたたずまいに胸を痛めた。だがブロンテ家の人々の風変りな、だが知的で個性的な印象を伝えている。²⁷⁾ 親戚以外ほとんど来客を迎えることのなかった彼らは、エレンの滞在を歓迎し彼女に好感をもった。

11 (27)

ハワース **33年6月20日

親愛なるエレン——もっと早くお便りせず、さぞ怒っていらっしやるでしょうね。なおざりにしていたように見えるでしょうが、理由があつてのことなのです。以前からお約束の訪問について、きちんとお招きできるとわかってから手紙を書こうと思っていたのです。こちらは山あいなので、冬はもちろん春でさえかなり冷えこみます。それで伯母がご招待するのは夏の半ば過ぎまで待たぼうがよいと言っていたのです。今では父も、お母さまがあなたに数週間のハワース訪問をお許し下されば大変嬉しい、と伝えて欲しいとのこと。いつがよいかは、あなたが決めてください。た

だしなるべく早くしてね。昨日ボル・テイラーから手紙が来ました。返事を出し忘れていたので、カンカンでした。直ちに机に向かいこちらの非をすなおに認め、丁重な手紙を書いて許しを乞いました。うまくいけばよいのですが。あのやっかいな、通常は致命的とはならない（と聞いて喜んでいますが）病氣、インフルエンザはいかがですか。これまでのところわたしたちはどうやら無事ですが、はたしてどれくらい無事でいられるものやら。ミス・テイラーによれば、ハナ・ヘイグがコロン・ブリッジのハウス・キーパーに昇格したそうです。きっと御満悦で、仕事にいつそう精をだすことでしょう。ブラッドベリ夫人は、ほんとうにいい人を見つけたと思いませんか。エレン、前便にはとても有益な決意がみられました。お便りを読みながら、わたしもあなたのような心境になれないものかと願わずにはいられません。なのに悲しいことに、わたしの心に浮かぶ善き考えは、それを捉える間もないうちに消失してしまうのです。正しい決心も、どれもがはかなく脆くたやすく崩れ去り、わたしはあるべき人間になれないのではと不安になります。²⁸⁾ あなたにはそんなことの無いよう、頑張り通して欲しいと思います。愛するエレン、いつも変わらぬ誠実な友より。

シャーロット・ブロンテ

追伸

すぐお便りください、よいお返事でありますように。

- 27) エレンはハワースを1833年の夏に初めて訪れた。その時の印象を‘Reminiscences of Charlotte Brontë’ (*Brontë Society Transaction*, 2 (1899) 収録) 中の‘Charlotte’s Early Life at Howorth’ と題された章に詳細に記している。
- 28) この時期シャーロットは‘Something about Arthur’ (5. 1833) と‘The Foundling’ (5-6. 1833) を書いている。主人公のアーサーはドゥアロウ侯爵と名前を変え、華麗な恋愛物語を展開しようとしている。

12 (28)

ハワース **33年9月11日

愛するエレン——前便からみてお留守なのだと思い、返事を出さずにいました。「馬車のことでジョージがブランウェルに気の毒なことをした」と言われる意味が、はじめよくわかりませんでした。でもようやく乗物代を折半したことらしいと察しがつきました。そのことなら、なにも問題はありません。宿の経費をジョージお兄さまが負担分いじょうに払ってくださったのですから、じつのところ結果的にはこちらこそ借りがあり、そちらはむしろ貸しがあるくらいなのです。²⁹⁾ お出立した後で、エミリが重い病氣になりました。腕の丹毒で、激しい不快な発作があり全身が衰弱しました。患部の炎症部分を除くために、腕を切開しなければなりません。幸い今では傷も目立たなくなり、ほとんど以前のように回復したようです。まだすこし吐き気が残っているようです

が。³⁰⁾ 皆があなたに会えてどんなに感激したか、ことばにしたらきっとお世辞だと思うでしょうね。父と伯母は、作法についてあなたを見習うようしばしば言います。エミリとアンは「ミス・ナッシュみたいに好感のもてる人は初めてだわ」と言っています。タビィときたらもうすっかり夢中で、あなたの淑女ぶりについて、ちょっとお聞かせできないような馬鹿なことばかりいっています。手紙の書体は無視してほしいわ。薄暗がりのなかで書いていますので。日もすっかり落ちて、いかに「夜目が効く」——ロウ・ヘッドのお嬢さま方のことば——という風変りな特技があっても、もうこれ以上は書けません。お母さまとお姉さま方によろしく。暗くなる一方なのでもう書けませんが、くれぐれもよろしくお伝えください。

29) 1833年9月、ブロンテたち4人は軽装の二輪馬車で、エレンと兄たち(ジョージとリチャード)と数人の友人たちと Bolton Bridge にある Devonshire Arms Hotel で落ち合い、廃墟 Bolton Abbey の見物に出かけた。エレンたち以外に何人か初対面の人たちがいたこと、また自分たちのみすばらしい様子に気後れしたこともあって、この旅行は惨めなものに終わった。

30) エミリは8月の終りころ腕に丹毒ができた。これは連鎖状球菌が傷口から入っておこる、急性の化膿性の伝染病で、震えや寒気とともに高熱が出て患部が赤く腫れ激痛を伴う。

13 (29)

ハワース 1834年2月11日

親愛なるエレン——郵便料金に値するようなお便りも書けないまま、そうこうするうちに今日になってしまいました。手紙をもらってから2カ月余りが過ぎ、あまりの筆不精に怒っていらっしやるのではないかと思ひ、気をとりなおしてペンを取ったところです。具合が良くないとのこと、心配です。肺疾患の疑いがあるということですが、きっとお医者さまの見立てちがいだと思ひます。エレン、もし本当ならそれは大変なことなのです。肺結核について、それを人の身にふりかかる最も油断のならない死病として恐れるだけのものを、わたしはこの目でいやというほど見てきました。くり返します。それが杞憂であって欲しいと願って、いえ、祈っています。学校でよく言ったこと、覚えているかしら。あなたはとても感じやすい方なので、ふさいで鬱にならないように気をつけなければ。いつも気持ちを引きたて、運動を欠かさずになさい。そうすれば気分も晴れるでしょう。なんというおかしな冬だったのでしょ！絶え間なく雨が降り風が吹いたのに、霜もなく雪もほとんど降りませんでした。バーストールの皆さまのお加減がすぐれなかったのも、こうしたじめじめした天候のせいだったのではないかしら。このところ、こちらでは例年になく多くの人たちが亡くなりました。³¹⁾ いつもながら取りたててお知らせするようなこともありません。こうしてお便りするのには、噂話をするためでも役に立つ情報を伝えるためでもないのです。文通を続ける目的は第一にあなたの消息を知ること、第二にお互いの存在を思いだすことにあるのです。こうでもしなければ

ば、いろいろな方々に囲まれていらっしゃるあなたは、当然わたしのような取るに足らない人間の
ことなど、たちまち忘れてしまうことでしょう。ところがわたしはといえば、この荒涼とした丘陵
の寒村で、何のつながりもないただ一人の友、かけがえのない学校友だちのことを来る日も来る日
も、いえ四、六時中思い続けるのです。さあ、エレン、なにもないところからなんて上手に一通の
手紙をつくりだしたと思わない？ さようなら、愛する友へ。神の祝福を。あなたの変わらぬ友より。

C・ブロンテ

今すぐお便りください。

31) ハワースでは家々よりも高い所に墓地があったため下方の水源は汚染されており、衛生状態は
劣悪であった。死亡率はきわめて高く、村で生まれた子供の半数近くが6歳前に死んでいた。当
時の平均死亡年齢はおよそ30歳であったという。ちなみに1848年に Public Health Act (公衆衛
生法)が制定されるまで、一般に排水設備は完備されておらず、汚水は路上に流される状態であっ
た。イングランド北部の工業都市(リーズ, マンチェスター, リヴァプールなど)は人口過密で、
チフス, コレラ, 結核などによる死亡率はイングランド全体の平均を上回っていた。

シャーロットとブランウェルの物語世界では、ロンドンは Great Verdopolis と呼ばれる活気に溢
れた壮大な都である。そこは議会が開かれ、陰謀が巡らされ、上流の人々が宴を催す世界の中心地
である。エレンに次の手紙14(30)を出した頃、シャーロットは 'High Life in Verdopolis' (2-3. 1834)
において、ドゥアロウ侯爵がくり広げる華麗な生活ぶりを描いていた。

14 (30)

ハワース **34年2月20日

愛するエレン——お便りほんとうに嬉しく、また少なからず驚きました。ロンドンにいらしたことは
すでにメアリー・テイラーから聞いていましたが、まさかお手紙をいただけるなんて。³²⁾ ヨーロッ
パの商業の中心地と呼ばれる大都会にいるあなたから。好奇心をかきたて、目を釘づけにしようと
趣向をこらした街の真中に、地方の少女がはじめて出てきたのです。しばらくは遠くの見飽きたも
のなど忘れて、目の前の光景にすっかり夢中になってしまうのが人間というもの、とわたしは思っ
ていたのです。けれど心のこもった素晴らしいお便りは、そんな推測をしたわたしの方こそ間違っ
ていて、そのうえ情け知らずな人間であることを教えてくれました。ロンドンの様子を淡々と記し
ていてそれほど感激していないようなので、わたしはとても不思議な気がしました。セント・ポー
ル大聖堂やウェストミンスター寺院を目の当たりにして、その壮大なことに心打たれなかったの
でしょうか。聖ジェイムズ宮殿で歴代の王たちが謁見を行なった宮廷やその壁にかけられた肖像画な
どを見て、感激するとか興味が湧くということはなかったのかしら。おのぼりさんと思われやしな

いか、なんて気にしてはいけません。ロンドンの壮麗なことは、世界中をめぐって各地で珍しいもの美しいものをさんざん見てきた人たちでさえ、驚ろきを隠さないのですから。いまは議会の会期中ですから、ロンドンに滞在しているお偉方を見かけることはありませんか。ウェリントン公爵、ロバート・ピール卿³³⁾、グレイ伯爵、スタンリィ氏³⁴⁾、オコンネル氏³⁵⁾なんて。わたしなら、せっかく街に来ているのに本など読んで時間を無駄にはしないとおもいます。今は自分自身の眼でよく観察し、しばらく作家がくれる色めがねはしまっておきなさい。健康を回復したとのこと、嬉しくて何といったらいいかわかりません。お便りが届く一週間ぐらい前に、まだいらっしゃるかと思ってバーストールに手紙を出しました。その手紙が届けられてはいけないと思い、できるだけ急いで重ねてこの返事を書いたというわけです。ご指示のとおり、バーストールのミス・M・ナッシュ宛てにしました。お母さま、お姉さま方にくれぐれもよろしくお伝えください。愛する友より、心をこめて。

C・B

追伸

王室軍楽隊の人数をお知らせください。ブランウェルが知りたいと申しますので。

32) エレンの長兄 John Nussey は宮廷医で、ロンドンの Cleveland Row に居を構えていた。

33) Robert Peel (1788-1850) イギリス保守党の創設者。1832年の選挙法改正案に反対し、その後ホイッグ党のグレイ内閣 (1830-34)、メルボーン内閣 (第一次34年) が倒れた後、保守党を率いてピール内閣 (第一次34-35年、第二次41-46年) を指揮した。

34) Edward Stanley (1799-1869) グレイ内閣ではアイルランド担当相 (1830-33) を務めた。

35) Daniel O'Connor (1775-1847) アイルランド独立運動の指揮者。アイルランドは長らくイギリスの植民地支配の下にあったが、1800年の合同法によりイギリス議会で議席を獲得した。オコンネルはクレア洲の選挙区から下院に当選したが、Test Act (審査法) によって議席に付けない事態となり、アイルランドで大規模な抗議運動が発生した。事態の発展を恐れた首相ウェリントンは妥協をはかり、翌29年にカトリック解放令を制定した。これによってカトリック教徒に対する差別は除かれ、いちおうの政治的復権がなされた。オコンネルは32年にも下院に当選し、中産階級やホイッグ党と提携した。

15 (31)

ハワース 1834年6月19日

愛するわたしのエレン——もうほんとうにそう呼んでもよいかと思います。今ごろはロンドンから帰りついたか、それともお帰りの途中なのですから。聖書に出てくるバビロンかニネベか、それとも古代ローマの魔都のようなロンドンから、あなたは帰ってくるのです。(いわゆる)誘惑の世界か

ら帰還するのに、お便りのようすでは出かけた時と少しも変わりなく、清らかで素朴なあなたのままのように思います。そんなことはないと言っても、わたしは信じません。自分の心は読めるので、自分の気持ちはわかります。でも他人の心は封印された書物や象形文字のようなもので、その封を解いたり文字を解読するのは容易なことではありません。けれど時間をかけてじっくりと眺め、気長につき合うならば、大方の困難は克服されるものです。そんな努力の結果、あなたの秘められた言葉に光をあて、その輪郭をつかむことができたようです。道は曲がりくねり平坦でなく、踏み跡も定かでなく、人間性を忠実に辿ろうとする旅人をしばしば途方に暮れさせましたが。心の書物のなかに友という文字を見いだしたと思いながら、後になって偽りの友を読んでいたことに気づかされる人たちがなんと多いことでしょう！わたしはあなたの心に、言葉に、行動に、久しく「友」の文字を見、そしていま鮮やかに記された「真」の友の姿をまざまざと見る事ができるのです！わたしのようにつまらない者のことを気にかけていただいて、ほんとうに感謝しています。この喜びが独りよがりでなければ良いのですが。友がわたしが思っていた以上に気高く信念の強い人であることを知ったのも、感激した理由のひとつです。あなたのように振舞える——華やかで目もくらむようなロンドンの魔力を前に、平静さを失わず都会の悪に染まらずにいられる人なんてめったにいません。お手紙には気取ったところは少しもありませんでした。ありふれたものを馬鹿にしたり、華やかな人々や物にたやすく心奪われてしまうような軽薄さは少しも見えません。けっしてお世辞ではなく——心の底からそう思っているのです。たとえばA・W(アミーリア・ウォーカー³⁶⁾)のような子を同じ状況においてごらん下さい。きっと大違いだと思います！これ以上は申しません。どうか素敵なお姉さまたちによろしくお伝えください。お父さま、伯母さま、妹たち、弟がみなくれぐれもよろしくとっています。暖かな愛情溢れるあなたの心の片隅に、真の友を住まわせてください。

36) Amelia Walker シャーロットの名付け親アトキンスン夫人の姪。彼女がすでにロウ・ヘッドにいたこともあって、シャーロットの同校への入学が決った。

1834年6月にリーズで地元出身の芸術家たち(肖像画家 William Robinson, 彫刻家 Joseph Bentley Leyland など)の展覧会が開かれた。子供たちを連れていったブロンテ師は感銘し、プランウェルの絵の指導をロビンソンに依頼した。夏から開始された一回2ギニーのレッスンは、プランウェルが王立美術院に応募するまでおよそ一年間続けられた。

16 (32)

親愛なるエレン——わたしの手紙の郵便料金を支払うのに、いささか嫌気がさしているのではない

かしら。なのに、また重ねてご迷惑をかけるようになってごめんなさい。素敵なお贈り物に、どうしてもお礼を言わなくてはと思ったのです。愛らしくて清楚なボンネット、まるで贈ってくれた方そのままです。色白のもの静かな面ざし、褐色の瞳に黒髪のエレンの姿がまざまざと浮かびました。ことばだけでなく何か感謝の気持ちを伝える術がないものでしょうか。こんなに親切にしていたきながら、わたしには何のお返しもできません。前便であなたはわたしに欠点を指摘してほしい、お世辞をいうのはやめにしてほしいと書いてありました。エレンたら、おばかさんね。あなたの欠点をあげつらう気なんて、わたしにはありません。なぜって知らないんですもの。大好きなお友だちから思いやり溢れる優しいお便りをもらって、その後で机に向かって返事に欠点をずらずら書きつらねる人なんて、いったいどういう人間かしら。そんなわたしを想像してみてください。はたしてどんな風に言われるものやら。うぬぼれ屋、独善家、偽善者、ちびのほら吹き、こんなのはまだ穏やかな方ではないかしら。ねえ、エレン、こんなに遠く離れていながら心慰められるお便りや贈り物をいただいて、ただただ美点ばかりが輝いて見えるのです。あなたの欠点を思い巡らす暇はないし、そんな気分になれるはずもないでしょう。そんな愉快でない仕事は、まわりの老練な方々にお任せしましょう。かれらの助言の方がきっと有益でしょう。どうしてわたしなどがしゃしゃり出る必要があります。助言に耳を傾けるつもりがあなたにないのなら、たとえ死者が立ち上がって助言を試みようともそれは無益というものです。わたしのことを好いてくださるのなら、どうかお世辞についてこれ以上ばかげたことをいうのはやめしてください。R・ナッシュさんが結婚なさるのですか。お見かけしたところでは、またあなたのお話からすると、選ばれた奥さまは聡明な愛らしい方のように思えます。エレン、このお世辞まじりの文句の後に、彼女の欠点について長々と述べたてねばならないのでしょうか。ライディングズを出られるとのこと、残念でなりません。イギリスの名館のひとつで、芝地や森に包まれ古き良き時代を物語る（少なくともわたしには）心安らぐ素晴らしい所でしたのに。マーサ・テイラーときたら、あなたのことをすこしも大きくなっていないなんていったのですね。彼女らしいわ。わたしもいっこうに背が伸びず、相変わらずのずんぐりむっくりです。最近メアリに手紙を出しましたが、まだ返事は届いていません。なにか読むべき本を勧めて欲しいとのことですので、できるだけ手短かに紹介します。詩がお好みなら、第一級のところでミルトン、シェイクスピア、トムソン、ゴールドスミス、ポープ（私自身はあまり感心しませんが、お好きならば）、それからスコット、バイロン、キャンベル、ワーズワース、サウジーあたりはいかがかしら。いいことエレン、シェイクスピアやバイロンの名前に驚かないでください。ふたりの作品は、偉大な作者そのものです。善なるものと悪なるものとを区別する方法は、おわかりかと思えます。優れた文章はつねに純粹で、邪悪なるものはきまって不快なので二度と読みたい気は起こらないものです。シェイクスピアの喜劇と、バイロンのドン・ジュアン、それから素晴らしい詩なのですがカインは除いて、あとは恐れず読んでください。ヘンリ八世、リチャード三世、

マクベスを読んで悪に染まるなどという人は、心が腐っている人に違いありません。ハムレット、ジュリアス・シーザー、それにスコットの甘美で奔放でロマンティックな詩に害はありません。ワーズワース、キャンベル、そしていくつか例外はあるとしてもサウジーの多くは、ほとんど問題ありません。歴史ではヒューム、ロリンできれば万国史がいいと思いますが、残念ながらわたしは読んでいません。小説はスコットだけで十分でしょう。スコット以降の小説はどれも読むに値しません。伝記ならばジョンソンの『詩人伝』、ボズウェルの『ジョンソン伝』、サウジーの『ネルソン伝』、ロックハートの『バーンズ伝』、ムーアの『シェリダン伝』と『バイロン卿』、ウルフの『遺稿』をお勧めします。博物史ではビュイック、オージュボン、ゴールドスミス、セルボーンのホテルなどがよろしいでしょう。

ハワース **34年7月4

シャーロット・ブロンテ

17 (33)

ハワース 1834年11月10日

親愛なるエレン——長いあいだ、ほんとうに長いあいだお便りしませんでした。今朝メアリ・テイラーから届いた手紙を読み、あなたにご無沙汰をお詫びしなければと思ひ、さっそく机に向かったところです。ブルックロイドのナッシおばさまが亡くなられたこと、気の毒にセアラの病気が重いことを知りました。セアラのこと、ほんとうにかわいそうでなりません。でも希望がないわけではないのでしょ。それでも心に留めておくべきなのは、万が一死が訪れても、それはセアラにとってはおそらく大きな恵みであろうということです。生きていてもほとんど喜びはないのでしょから。ハリビー・ブルック社の破産というか支払い停止に関して、詳細を教えてくださいませんか。まだ倒産と決ったわけではないのでしょ。ブルック夫人、バックワース氏、カーター夫人、ジャクソン夫人は全財産を預けていたのでしょうか。事件が片付けば、債権者には返金されるのかしら。あれこれお尋ねするのは、父の昔の知合いがブルックロイドにいて、事件の影響を心配していらっしやるからなのです。わたしの学校時代の友人も何人かいますし、彼女たちの不幸に無関心ではいられません。かわいそうなりーとマライアのブルック姉妹！³⁷⁾

前便で、ダンスの楽しみをどう思うかとお尋ねでした。年若い男女がパーティで1、2時間ダンスを楽しむのは良いか悪いかという内容だったと思います。オールバットさんやお姉さまに異論を唱えるようで気がひけますが、でも問題はつまりこういうことではないかしら。広く言われているように、ダンスの罪は（スコットランド人に言わせると）すねを震わすことよりも、それに伴って往々にして起こる結果——軽薄さと時間の浪費にこそあるのではないでしょか。あなたの言っているように、若者たち（神の命に背くことがないかぎり、少しは陽気であっても許されるはずです）がほんの小一時間、運動と気晴らしを目的としてダンスくらいしても、そうした結果など生じるは

がありません。ゆえに（わたしの論法では）かかる場合の娯楽には罪無し、となります。

ほかにお知らせしたいことも特にありませんので、ここで終りにします。エレン、心からなる愛をこめて。

シャーロット・ブロンテ

すぐにお返事ください。乱筆乱文をお許してください。さようなら。

37) Leah, Maria Brooke デューズベリの裕福な家庭の娘で、ロウ・ヘッドでシャーロットの同窓だった。同家とはブロンテ師も副牧師の頃から20年来の知合いだった。

次はエミリの日記。月曜の朝の牧師館のようすが伝わってくる。政治の動きもまた気になるところだ。崇拜的だったウェリントンが首相になって以来、ブロンテ家ではずっと老將軍の政治手腕に注目してきた。29年のカトリック解放令、31年の選挙法改正案、そしていま懸案になっているアイルランド法案、めまぐるしい政権の交替劇を報じた新聞記事は、かれらの数少ない娯楽であった。

18

1834年11月24日（月曜日）

レインボー、ダイヤモンド、スノウフレイク、それにジャスパー（通称）の雉に餌をやった。今朝ブランウェルがドライバーさんのところに行って、ロバート・ピール卿がリーズから立候補するよう依頼を受けたというニュースを聞いてきた。³⁸⁾ シャーロットがアップル・プディングを作るので、わたしとアンはりんごの皮をむいていた。伯母さま用に・・・シャーロットが素晴らしいプディングを作ってみせるといって・・・頭の回転は早いけど中身はそれほどでもない。たった今タビーが、「アン、来て、じゃがいもの皮をむいておくれ」と言った。伯母さまが台所に入ってきて、「アン、あなたの足はどこにあるの」というと、アンは「床の上よ、おばさま」と答えた。パパが居間の戸を開けて、ブランウェルに手紙を渡して、「ほらブランウェル、これを読んでごらん。伯母さまとシャーロットにも見せてやりなさい」といった。ゴンドルの人々はガールダインの奥地を探検しているところだ。³⁹⁾ サリー・モズレイが台所の奥で洗いものをしている。

12時をまわった。アンとわたしはまだ身じたくしていない。寢床の片付けも勉強もまだ。外に遊びに行きたい。ディナーはボイルド・ビーフ、かぶ、じゃがいものにアップル・プディング。台所は散らかり放題。わたしとアンは口長調の練習がまだ済んでいない。ペンを持っているのを見て、タビーは「じゃがいもの皮むきもしないで、油を売って」といった。「ええ、わかったわよ、すぐするわ」こう言いながらわたしは立ち上り、ナイフを取って皮むきをはじめた。皮むきが済んだら、パパは散歩にいくらしい。サンダーランドさんが来ることになっている。⁴⁰⁾

何事も起こらなければ、1874年にはわたしたちはどうなっているか、どこでなにをしているか、

とアンとわたしは話した。その年、わたしは57歳、アンは55歳、ブランウェルは58歳、そしてシャーロットは59歳のはずだ。それまでみんなが元気であることを祈って日記をとじる。

エミリとアン

- 38) リーズは1832年の選挙法改正の結果、他の大工業都市マンチェスター、バーミンガム、シェフィールドと並んで新しい選挙区となった。
- 39) エミリとアンは、初めはシャーロットとブランウェルを中心にしたグラスタウン物語などに加わっていたが、1831年から自分たちのゴンドルの世界を展開していた。北大西洋の架空の島を舞台とした物語で、Augusta Geraldine Almeda とその愛人 Amadeus や Julius Brenzaida とその恋人 A. G. A (エミリのヒロインの名前の頭文字) らを主要な登場人物としている。現在ではわずかに残された詩からその概要を推察するしかない。
- 40) Abraham Sunderland キースリー教区教会のオルガン奏者。ブロンテ師は彼に子供たちの音楽のレッスンを依頼した。この年(34年)の5月にはハワース教会に新しいオルガンが奉獻され、盛大な祝賀会が催された。またブロンテ家でも小さな直立ピアノを購入し、近眼のシャーロット以外は皆サンダーランド氏からピアノを習った。

(三) 1835年から1836年(4月まで)

10代の終りに差しかかっていたブロンテたちは、それぞれ自活の道を切り開かねばならない時を迎えていた。ただ一人の男子であるブランウェルは幼い頃から特別に父から教育を受け、絵画や文筆の才を発揮し、家族全員から将来を囑望されていた。彼のためには皆が自分を犠牲にすることは当然のことであった。いっぽう、遺産らしいものを期待できない娘たちには、結婚しないかぎり気の進まないガヴァネスになって自ら我身を養うしかないという現実があるのみだった。この年、アン以外はみな外の世界に出てゆき、それぞれの挫折を味わわれてハワースに舞い戻る。シャーロットは辛うじてロウ・ヘッドに踏みとどまるが、心はそこになかった。

19 (34)

ハワース **35年1月12日

親愛なるエレン——ご親切なお便りをいただきましたが、あまり早く返事を書かない方がよいのではないかと考えました。(何かと時間がつまっている)あなたを煩わせてはいけませんので。ご招待について父の許しが出ましたので、お知らせします。わたしのほとんどだたひとりの、そして(家族をのぞけば)まちがいなく最愛の友と再会する喜びが間もなく訪れるのです。その日をいつにするかはお任せします——ただあまり早くしないでください。この手紙の日付から少なくとも2、3週間後にしませんか。ブラッドフォードまで迎えに来てくださるとのこと、大変ありがたいです。

でも父はそうした計画は不安だし、ご迷惑をかけることになると考えています。それでギグを雇ってハウスから直接ライディングズまで行ってはどうかと言います。あなたが日を決め、もしその日、天気が悪くなければ、次に晴れた日ということ。そのように決めておけば、どちらも縛られずに済むでしょう。あなたに異存がなければ、結局これがいちばん良いように思います。セアラがほとんど全快したとのこと、とても嬉しく思います。でもその代わりにマーシーが病気では、喜びも消し飛んでしまいます。けれどもふたりとも——今ごろはきっと良くなっていることでしょう。エレン、簡単な便りでごめんなさい。急いでいるものですから。間もなく会えるのですね。お顔を見る方が手紙を百通もらうより素晴らしいわ。お母さまとお姉さまによろしく。家中の者がよろしくと申しております。あなたの変わらぬ誠実な友。

シャーロット・ブロンテ

20 (35)

ハウス 1835年3月13日

親愛なるエレン——わたしからの便りをお待ちかねでしょうね。いつお便りしたらいいのか、とくに聞いていなかったので遅くなくてもあまり怒らないでください。こちらに戻りました。あなたからすっかり離され、ふたりの間の距離は17マイルどころか100マイルにも感じられます。声を聞くことも姿をみることも気配を感じることもできないのです。ただ心に思い浮かべられるだけの、実体のない面影だけの人になりました。でも幸いなことに、それはだれにも消せはしません。帰り道はやはり寂しかったです。お供の方と話をすることでもなかったら、もっとずっと沈んでいたことでしょう。Kさんはとても物知りで、まるでカトー（だれのことかおわかりでしょう）のようでした。船員時代の冒険の数々、難破の体験、西インドで出会ったハリケーンのことなど、世間の話自慢の人たちよりよほど流暢にお話してくださいました。ハウス周辺の荒涼とした風景にはさすがに驚かれた様子で、きっとお帰りになってたっぷりとお話なさったことでしょう。大変な勉強家で、地名や地理などいろいろお尋ねになるのですが、わたしにはほとんど答えられませんでした。さぞかしわたしのことを無知な娘だと思われたことでしょう。

最近の政局についてどう思いますか。⁴¹⁾ こんな質問をするのは、今ではあなたもこの問題に関心をもっていると思うからです。以前はともかく。ブルームが勝つなんて。⁴²⁾ あの卑怯者が！わたしは大嫌い。この世に心から憎む人間がいるとすれば、あの男以外にありません。ところが野党ときたら、急進派と穏健派で仲間割れしている有様なのです。公爵（公爵といったらこの方しかいません）とロバート・ピール卿は不安などおくびにも出しません。これまで二度も敗れているのに。「勇気をもて、我が友よ」です。天は正しい者に味方する！かつて戦いに赴く騎士たちが誓いの言葉としたものです。エレン、この大仰な文句を笑ってもかまいません。でもそれはご自分で招いたことなのです。メアリ・テイラーに出すような手紙を自分にも欲しいと言われたのを忘れたかしら。

これはほんの一例です。この後さらに書評が長々と続くのですが、それは遠慮しておきましょう。お母さま、お姉さまたちによろしく。家中の者があなたに心からよろしくと申しております。

愛するエレン、友より。シャーロット

追伸

忘れてきた傘をブラッドフォードのブルズ・ヘッド・インに届けてほしい旨、ケリーさんがお伝えしませんでしたでしょうか。集配人が木曜に受け取りにいったのですが、届いていませんでした。辛いそれほど高価なものではありませんので、どうでもよろしいのですが。

41) アイルランド政策をめぐる国会が紛糾し、1834年11月にはメルボーン内閣が解散して4年にわたるホイッグ党政権が崩壊した。ジョージ四世から組閣を命じられたウェリントン公爵は、ロバート・ピール卿に連合を求め、同年12月にトーリー党内閣を発足させた。だが6週間に6度もつまづくという多難な出発で、翌35年4月に崩壊した。

42) Henry Brougham (1778-1868) ホイッグ党のグレイ内閣(1830-34)で大法官を務めたが、35年にMelbourne卿が政権に着き、失脚した。

21 (36)

ハワース **35年5月8日

親愛なるエレン——お便りの日付からみて、それが書かれてからわたしの手に渡るまで、ちょうどひと月と4日かかっています。わたしの手に渡ったのは先週の月曜日でした。それまでずっとブラッドフォードのブルズ・ヘッド・インで傘の中にぬくぬくと包まれていたわけですから。集配人が忘れていて、傘のことを聞いてくれなかったのです。手紙が書かれていた頃には、具合が悪かっただけのバックワース氏が、今ではもう亡くなられ土の下なのです！⁴³⁾ デューズベリーでの居心地はけっして良くありませんでした。でも今はきっと天国に安住の地を見いだしていらっしゃることでしょう。新聞によればT・オールバットという方が後任になられたそうです。マリアンヌ・ウラー先生は近々お名前を変えられるのかしら。もう延ばすべき理由はすっかりなくなったのですから。選挙、選挙の呼び声が、こちらの荒涼とした丘陵にもラッパの音のようにこだましています。⁴⁴⁾ 賑やかなパーストールの辺りはどんな様子ですか。エレン、お兄さまたちはどの旗を推しているの？青色それとも黄色かしら？あなたのお力で、場合によってはひざまづいてでも、この危急存亡の秋にあたって母国と宗教を支持してくれるようお願いしてください。ヨークシャー州ウェストライディング中の人たちが・・・自分たちの力を行使する時だということを自覚してくれば・・・ヨークシャーきっての愛国者の子息スチュワート・ワートリー⁴⁵⁾が地元の代表として選出されますように。先週、モーペス卿⁴⁶⁾がハワースを訪れました。彼の印象は、昨日メアリ・テイラーへの手紙のなかで書きました。繰り返すまでもないので、ここでは遠慮しておきます。マーシーに「優しい真心」を送ります。ハ

リスンさんが永久に去ってしまうなんて——断じてありません。そんな気の滅入ることを考えるのはよしましょう。彼だって損得くらい考えるはずです。しっかり目があるならば、自分にとって利益がバーストールにあることくらいわかりそうなものです。マーシーに伝えてください。厚かましいお願いですが、お手紙をいただければたいへん嬉しいですよ。お母さまによろしく。心から愛をこめて、エレン。

シャーロット・ブロンテ

追伸

伯母と妹たちがくれぐれもよろしくとのことですよ。

- 43) Rev. J. Buckworth ブロンテ師は1809年にデューズベリの All Saints Church に赴任し、バックワース師の下で副牧師を務めた。
- 44) ピール内閣が35年4月に倒れたため、5、6月にわたって総選挙が実施されることになった。ハワースではブロンテ師やドライバー医師、ポンデン・ホールのヒートン家、そのほか富裕な農業経営者などがトーリー党を支持した。ブラック・ブルの前で行なわれた立会い演説会では、ブロンテ師の演説に土地の聴衆の野次が飛び、ブランウェルが猛烈な抗議をした。選挙の結果はブロンテ家の期待に反して、メルボーン卿が政権に返り咲いた。
- 45) John Stuart-Wortley (1801-1855) 第2代 Wharnccliffe 男爵。国会議員として Bossiney (1823-32) 続いてヨークシャー州のウェスト・ライディング (1841-45) から選出された。
- 46) Lord Morpeth こと George William Frederick Howard 第7代 Carlisle 伯爵。モーペス子爵時代にモーペス (1826-30)、その後ヨークシャー州 (1830-32) 続いてウェスト・ライディング (1832-1841および1846-48) から選出され、国会議員を務めた。

1835年夏、ロビンソンから一年間にわたって指導を受けてきたブランウェルは、ロンドンの王立美術院へ入学すべく、事務局にあて次の手紙22 (37) を書き送った。

22 (37) [王立美術院事務官へ]

前略——見習生として王立美術院へ入学を強く希望する者ですが、必要な手続き等についてなんら情報が入手できません。不躰とは存じましたが、以下の点についてお尋ねする次第です。

作品はどちらに提出したらよいのでしょうか。

またその時期は、

8月または9月でもよろしいのでしょうか。

1835年の秋が訪れようとしていた頃、ブロンテ姉弟妹がハワースから外の世界に出ていく時が訪れた。シャーロットはかつて自分が学んだロウ・ヘッドの教師として、そしてエミリは生徒として受入れられることになった。またブランウェルは、資金も紹介状も整い出発を待つばかりだった。子供たちを送り出すブロンテ牧師は、心配しながらも誇らしげに友人たちに手紙を送っている。

23 (38)

愛するエレン——今年の夏はハワースで会えるものと、それは楽しみにしていました。なのにままならないのが世の中というもの、黙って事の成行きに身をまかせるしかないようです。私たちはみんな離れ離れになり、各々の道を歩もうとしています。エミリは学校に行くことになっています。ブランウェルはロンドンへ、そして私はガヴァネスになる予定です。⁴⁷⁾ 後者についてはわたし自身で決めたものです。いずれは踏み出さねばならないものなら、スコットランドのことわざにあるように「鉄は熱いうちに打て」というわけです。ブランウェルが王立美術院に入学し、エミリがロウ・ヘッドに行くことになれば、父の乏しい収入でもう精いっぱいなのですから。わたしがどこに住むかですって？——愛するあなたのお家から4マイルと離れていない、わたしたちふたりにとって知らない場所ではない所、つまり前述したロウ・ヘッド以外にありえません。そうなのです。わたしは自分が学んだ学校で教えようとしているのです。ウラー先生のお勧めで、わたしにはこれまで2、3話のあったガヴァネスの職よりも、こちらの方が気に入ったのです。家を離れるのはとても悲しいです。けれども義務——必要といいましょう——これらは逆らうことの許されない厳格な主人なのです。前に申し上げたかと思えます。エレン、あなたは誰の世話にもならないでいられることを感謝しなければならないのですよ。その時も本気でしたが、今ではそれに倍する気持ちでくり返したいです。せめてもの慰めは、あなたの近くにいられるということくらいです。ポーリーと二人できっと会いに来てくれますね——疑ったりするわたしが間違っていることでしょうか。これまであなたが親切でなかったことなんて一度もないのですから。エミリと私は今月29日に出発します。ふたりと一緒にいられるので少し気が楽です。どうしても働かねばならないのなら、「頃合のところに収まった」というべきなのでしょう。ウラー先生のごことは好きですし立派な方だと思っていますので。なぜわたしがお姉さまの手紙を欲しがったか、理由がわかったというのはどういう意味なのかしら。よく理解できませんでしたが、なにかしら傷つきました。理由はただ好意を寄せている人から便りをもらいたいというだけのことで、他意はありません。お姉さま、セアラ、そして皆さまによろしく。お母さまにくれぐれもよろしく。最愛の友へ

C・ブロンテ

**35年7月2日

便箋が染みだらけなのが恥ずかしいです。でも清書している時間はありません。汚くてごめんなさ

いというしかありません。他のひとにはどうか見せないで。字もひどいので。

47) マーガレット・ウラーは妹ふたりが結婚し、生徒が増えて新しい教師を必要としていたこともあって、卒業して3年になるシャーロットに教職につくことを依頼した。エミリの教育の必要にも迫られていたので、シャーロットの報酬の一部を妹の授業料にあてるという提案は願ってもないものだった。17歳の誕生日の前日、エミリは姉と共にハワースを後にした。だが彼女は学校になじめず、3カ月後に帰宅した。

24 (39)

1835年6月6日⁴⁸⁾

拝啓——このほど娘がふたり、お近くに参ることになりましたので、勝手ながらお便り申し上げた次第です。どうか必要な折には娘たちの相談相手になり助言などいただけますよう、おふたりに切にお願い申し上げます。もし何かございましたら、私かミス・ブランウェルにお知らせ願えませんかでしょうか。娘たちにはこの手紙のことは口外していませんが、お言いつけには従うよう申しつけておきます。どちらも能力はあり、私の見るかぎり躰はなされているものの、なにぶんまだ幼く、偽りに満ちた罌だらけの世間というものを知りません。ウラー先生の下で、よきご指導を受けられるものと確信いたしておりますが、それにしても彼らにせよ他の誰にせよ、この試練の地にあつて誘惑から自由であり続けることはできないものと存じております。息子のほうは、ご記憶かと思いますが、親友ファース夫妻のご援助により、ロンドンの王立美術院に入学することになっております。⁴⁹⁾可愛い小さなアンは、あと一年くらい手元において義姉と私とでみてやるつもりです。こうした計らいができましたのも、あなたをはじめとしてミス・ウースウェイト、ファース夫人などひとえに友人諸氏のお蔭です。数々のご温情に心より感謝しております。ほぼ健康を回復された由、またご主人と幼いお子たちがみなご健勝のようす、みな心より喜んでいます。4、5年前になるでしょうか、まだ赤ん坊のお子さんを私が抱いてあやそうとしたことがございました。とても驚いて嫌がるので、ミス・ウースウェイトにお返ししなければなりませんでした。彼女の腕の中ではむずかりもせず安心しているのです。私の健康状態は概してきわめて微妙です。しかしながら慈悲深い神のご加護により、なんとか牧師の務めを果たしています。ソートンを出てからずっとこの方、身体の具合がどうもはっきりしません。私の最も幸福だった日々は彼の地で終わったのです。ここでは一応のもてなしを受けており、私も村人たちに礼を尽くしているつもりですが、あえて友人を作ろうと努力する気はありません。私とおなじ考え方をする人はひとりもいないのです。ソートンにもキッピングにも長らく足を運んでいません。最後に出かけた折りに思い出の場所をいくつか巡り、死が奪い去った愛する妻と娘たちの面影を追ってみました。教会の中に入ってみると、よき相談相手であった愛する友が、今では我が足の下に眠っていることが思われ、急に悲しみが胸にこみあげてき

ました。それからお宅の庭を散歩し——人生の有為転変により——この地から去っていった懐かしい友人たちの一人ひとりを思い浮かべてみました。そしてすべてが変わってしまったのだということに気づかされました。家に帰った私は、もはや二度とソートンもキッピングも訪れまいと心に決めたのでした。よほどやむを得ない事情がないかぎり。多少の変化というか改善がなされたように聞いています。けれどそんなことは私よりあなたの方がよく御存知でしょう。生まれ育った所なのですから、よく訪ねておられることでしょう。不運、転変、試練に満ちたこの世にあって、それでもなお確固として信じられるのは、天に対する揺るぎない希望だけといえましょう。神にあって気まぐれはなく、転変の影すら見えません。こうした至福への思いは残された人生において、とりわけ永遠の時へと踏み出すその時にあたって、必ずや心の平安を与えてくれるものと信じます。英国国教会に仕える我々は今、外からは教会と国家に反対する無数の頑迷な敵の攻撃にさらされております。さらに内なる敵をも抱えているといえるかも知れません。けれど忍耐強く信仰心をもって虚心に主を仰ぐなら、そして聖書に基づいた正しい教えに従うならば、最後には死も地獄も乗り越え、人の手によるものではない永遠の住み家を天上に見いだすことでありましょう。

ご主人にくれぐれもよろしくお伝えくださいますように。また私の心優しき友ファース夫人とミス・ウースウェイトにお会いになったら、ぜひよろしくお伝えください。ご迷惑をおかけし、心よりお詫び申し上げます。

48) ブロンテ師がフランク夫人に宛てた手紙。

49) 王立美術院の費用は無料だったが、ロンドンでの3年間の生活費が必要であった。これにはフランク夫人の継母ファース夫人や伯母などが援助を申し出た。

25 (40)

ヨークシャー州ブラッドフォード近郊ハワース⁵⁰⁾

1835年9月7日

拝啓——結構な贈り物をいただき感謝にたえません。贈り主の信条や才能のみならず、優れた技量が感じられます。また息子への格別なご配慮に御礼申し上げます。彼が持ち帰りました貴殿の絵には真実と生命が溢れ、余人には期待すべくもない、天才のみが与えうる何か認められました。彼が使用していないときには、しばしば私の部屋に飾り、楽しませて頂いております。私自身はほとんど絵はたしなみませんが——鑑賞は大いにします——立派な絵画は格別の喜びを与えてくれるのです。絵の子どもは愛らしく、表情豊かで——これから成長するにつれ、心の方もその顔立ちにふさわしいものになるでしょう。どのようにして座らせておけたのでしょうか。リーズに出ることがあれば、なにか面白くてためになるような本でも買ってあげられるのですが。しかし当面、出かける予定がございませんので、勝手ながら半ソヴリン同封させていただきます。私の名前でご

かプレゼントするか、私に代わってあなたのお考えで、子どもの喜びそうなものにお使いください。

ご都合がよければ、レッスンの仕上げのためにブランウェルが来週の金曜日にお伺いしたいと申しております。

敬具

P・ブロンテ

50) ブロンテ師が William Robinson (1799-1839) に宛てた手紙。ロビンソンは1820年にロンドンに出て、Thomas Lawrence 卿に認められ王立美術院に学び、当時の著名な画家たちと親交を結んだ。肖像画家として人気が出て Wellington, Duke of York, Princess Sophia などを描いたが、人気絶頂の中で故郷リーズに帰り1839年に結核で早逝した。

ロンドンに出たブランウェルは父が泊まったことのある Chapter Coffee House に滞在し、市内見物をした。憧れていたボクシングの元イギリス・チャンピオン Tom Spring が経営していた High Holborn にある Castle Tavern に出かけた形跡がある。また大英博物館や国立美術館などで Reynolds, Gainsborough, Lawrence といった巨匠の名画に触れ自信を喪失したのか、王立美術館には現れず一通の紹介状も渡せないまま、ハワースに逃げ帰った。家族は彼の説明にもならない説明を黙って受け入れ、それ以上問うことはなかった。ブランウェルの画家としての夢は破れたが、彼にはもっと大きな夢があった。それは幼い頃から読みふけてきた「ブラックウッズ」の投稿者になることである。彼は編集者にあて3回にわたって手紙を書いている。

26 (41)

拝啓——我が文を読まれたし。⁵¹⁾

どうかここに書かれた内容が真実であることを信じていただきたい。さすれば貴殿もご注目ください、然るべく処置していただけるであります。

すでに再三にわたりお便り差し上げましたが、いま重ねて筆をとります。はじめにジェイムズ・ホッグ⁵²⁾の名前を出したからといって、にわかには愛読者を気取るつもりはまったくございません。なぜなら幼少のころより貴殿の雑誌で目にした彼のお方の作品や「ノクツ」⁵³⁾に載せられた書評は、我輩の心を深くとらえ、やがて歳月を経るにつれ、それは崇拜の念へと高まっていったからであります。おわかりいただけるものと存じますが、子供ながらもウィルソン博士⁵⁴⁾のような方の論文に巡りあい、詩さながらの文章に触れえた喜びは、とうてい筆舌に尽くしがたいものであります。飽かず読み返した空想の世界への神々しいばかりの飛翔、幼いものはそれを現実と思い、大人にならんとするものは鮮やかな夢として振り返ることでございましょう。かく語るのも「ブラックウッズ」こそ我が幼き日の最高の楽しみであり、小生ほどこれに親しんだ者はいないと確信致すからであります。「ノクツ」「クリスマスの夢」「狩り着をまとったクリストファー」に勝る読物を、おそらく誰

も目にしたことはなかったであります。「知恵ある何百万という生き物が、この瞬間に——否、さにあらず」とか「ずいぶん昔のことに思われる、金髪の美しい姉、見る人すべてを虜にした姉と手を取り合ってダンスをしたのは、姉の死んだ遠い遠い日。この世のいかなる時よりも、暗く閉ざされたあの時。姉と棺と別珍の覆いは——静かにゆっくりと——忌まわしい泥土のなかへと降ろされ、わたしたちは教会墓地から、この後二度と再びそこには戻れぬと感じながら、そして死をとともにしたいと思ひながら、死者のように連れ出されたのであった」といった文章が、今もなお（後者が書かれた頃、わが姉が死んだのですが）⁵⁵⁾——こうした文章が、あの頃に読まれ、そして今もよみがえり、幾度も申しますように、言葉に尽くせぬ喜びを与えたのであります。ところがあのような感動を呼び起こした人々のひとりが今はなく、その話は本人はおろか貴殿を通じて二度と聞くことはできません。彼の死を心より悼みます。なぜなら今後なにをもってしても、彼によせる思いに勝るものはありえませぬし、貴殿にとって彼は驚くべき独創性を備えた寄稿者、そして「ノクツ」においては並ぶものなき貴殿の作品の主人公であったのですから。彼をはじめとした俊英が貴殿の雑誌に独特の持ち味を与え、その名を高からしめたのであります。彼ら亡き今、それに代わりうる人間を補わなければ、雑誌は衰退の一途を辿ることでありましょう。さて貴殿の目にはわたしのもの言ひは、いかにも鼻もちならぬ自惚れと映るかもしれません。しかしそうではございません。自分の独創性を信じるという限りにおいて、わたしは己を知っております。そしてそれを根拠として、わたしを戦列にお加えくださるよう切に望むものであります。この私の決意をお疑いにならないでいただきたい。なんとなればすでにお話した思い出ゆえに、貴殿とその雑誌は我が胸の内に深く刻まれ、これ以外の定期刊行物に手を貸すことなど論の外とまで思わせるからであります。わたしの決意は我がもてる力を貴殿に捧げることにございます。さすれば貴殿にお仕えできるものか否かを見極めずして、冷やかに我が願いを退けることのなきよう、くれぐれもお願い申し上げます。望むらくはせめて——返書としてわが作品を2、3篇送れとなり、あるいは拙者に書かせてみたいテーマをお知らせいただけますことを。以前の手紙ではわが能力についていささか率直に言いすぎたかも知れませぬ。しかしそれも自分の信念を申し述べたい一心からでした。わたしはけっして昨今のお粗末なものの書きのひとりではありません。貴殿の寄稿者のある人たちよりは、お役に立てるものと存じます。けれどこの点については貴殿に判断を委ね、決定の榮譽をお任せ致したく存じます。

さあ、どうか凡人ぶらずに、自らを頼む者らしく行動なされますように。我が文の紛れもない真実から目を背けず、わたしをお試しあれ——わたしがその期待に添えないものなら、このうえご無理は申し上げます。もし添えるならば——そう——ジェイムズ・ホッグなるひとりの有能な作家を失った貴殿に対し、神は今やその彼に代わるべき人間をお与えあそばしたのです。すなわち次なる人物を。

パトリック・ブランウェル・ブロンテ
 ヨークス ブラッドフォード近郊ハウス
 1835年12月〔7日〕

- 51) ブランウェルがブラックウッズの編集者に宛た手紙。
- 52) James Hogg (本名 Ettrick Shepherd) *Blackwood's Edinburgh Magazine* 創刊以来, John Wilson, John Gibson Lockhart, William Maginn と並んで主要な寄稿者のひとりであった。35年11月21日に死亡。ブランウェルはその後任になれるのではと考え、3回にわたって手紙を書いたが、返事は来なかった。
- 53) “Noctes Ambrosianae”というタイトルで、ブラウズに1822年から35年にかけて、毎月連載されていた論集。才人たちが Ambrose’s Hotel でシンポジウムを行なうという形式を取っていた。ブロンテたちはこれを真似て、自分たちの物語では “Bravey’s Inn” での対話を連載した。
- 54) John Wilson (1785-1854) Christopher North というペンネームを用いて、“Noctes” の大半を執筆していた。1820年からはエディンバラ大学の哲学教授を務めた。
- 55) ブランウェルのふたりの姉マライアとエリザベスは、1824年7月、カウアン・ブリッジの学校に入学した。(8月にシャーロットが、11月にエミリが加わった。) 牧師 William Wilson が24年1月に、牧師の娘の教育を目的として設立したこの学校は *Jane Eyre* の Lowood School のモデルとなった。25年春、学校をチフスが襲い生徒が死亡する事態になった。マライアは結核にかかり2月14日に帰宅したが、それから3カ月もしない1825年5月6日に11歳で死亡した。続いてエリザベスも5月31日にハウスに戻されたが、6月中旬に死亡した。

27 (42)

ヨークス ブラッドフォード近郊ハウス

1836年4月8日

拝啓 少なくとも以下を読まれたし……

同封致しましたのは「ブラックウッズ」への折込み用に如何かと思いましたが、⁵⁶⁾ 出来の良し悪しはともかく、切にご一読を願います。ご不快かも知れませんが、お読みになれば、それを火にくべて果して損であったか得であったか、おわかりになられるでしょう。自ら自分の能力を云々するのは僭越というもの。それがつまらぬたわ言であるか否かは、五分もすればおわかりになれましょう。仮りにたわ言といわれましても、わたしとしてはそれで諦めるつもりは毛頭ございません。なお一層能力を磨き、やがてそれをお見せしたいと考えます。

どうか駄作ばかりと決めつけないでいただきますように。すでに闇夜は明け、陽は高く上っておりますので。また (これは是非ともお願いしたいのですが)、詩のみ送る積もりはございません。

詩をお送りしたのはあくまでも読みやすく、また心情が素直に表れているからというにすぎません。もし心に響くものあれば、どうぞ活字になさって結構です。そして後ほど寄稿についてお便りくださいますように。さすれば散文をお送り申し上げます。けれどもこの度お送りいたしましたものが取るに足らぬということなら、わたしの申し出もただの愚かなる自惚れというまでです。しかしながら聞く耳もたずして、ただうち捨てるのはご容赦願います。

P・B・ブロンテ

ヨークシャー州ブラッドフォード近郊ハワース

56) ブランウェルが送った詩は'Misery'と題された作品である。その第一部はロンドンから帰って間もない1835年10月から12月の間に書かれた。続編は翌36年3月に書かれた。